

オオカミを火の海で包囲 93  
悪夢の中で 100  
荒野を駆ける鹿の大群 106  
ここにも人間が…… 118

第三章 稲の村…………… 127

「トビをしるしとする村」 127  
使者、帰る 137  
喜びは森をゆるがす 146  
鹿の骨の占い 155  
まじない師ミコの死 158  
「鹿をしるしとする村」へ 164

あとがき…………… 171





そうてい・堀内誠一  
さしえ・高士 登

# 第一章 狩り

## 一撃のもとに

草の茂みで、おれはじっと息をしのばせて待った。

やつは、きっとまた顔をだす。そしたら、こんどこそ一撃だぞ。右手にしっかりとにぎりしめている石ころが、ぐっしょりになるほど汗ばんで、

ドッキ ドッキ ドッキ……

胸のなかの魂の音が、しゃがみこんでいるおれの耳にも、はっきりと、伝わってくる。



「おっ、でた。」

日照りつづきで、ポコポコになった土のなかから、やつ  
の黒い鼻さきが、ちょこんとでた。

「しめた。」

おれの胸の魂が、いっそう激しく鳴りだした。待て待て、  
あわてちゃいけない。

ひよこ、ひよこ、ひよこ

やつは鼻さきを、もぞもぞさせながら、しだいに土の上  
に顔をだしはじめた。ちえっ、なんて、とほけた顔してや  
がるんだろ。みる、あの口から鼻、そして、あるかないよ



それにしても、きょうは、なんて運がいいんだろう。いや、おれが辛抱して、やつがでてくるまで待っていたからよかったんだ。おれは、ひとりニヤニヤしながら、うちのほうへむかってかけた。

### 狩りと漁をもとめて

おれたちの住んでいる村は日あたりのいい小さな丘の上にある。丘のてっぺんからは、どこまでもつづく樹の海が一面に見わたせ、そのはるかかなたには、日の神さまがのぼるけわしい山なみが、ほうっとかすんで見える。日の神さまの沈む潟地のむこうには、青あおとした海がはてしなくひろがっている。

その丘の中腹には、地べたを、おとなが四、五人足をのばして横になれるくらいに広さで掘りくぼめ、丸太と木の枝や草の葉っぱで屋根をふいた家が、村長の家を中心に、丸い輪をつくってたっている。

おれたちは、数を数えるのに手と足の指を使う。一から五までが全部で、それいじょう数えることになる、なかなか、めんどろだ。五を数えたら、また、もとにもどり、数がめんどうになると、両手と両足の指を使う。それでも

足りなければ、他人の手と足を利用する。まったく数ってやつは、やっかいだ。だからとにかく村人の数は、おれたちこどもには、数えることができない。でも、村長はしっている。村長の家の前のケヤキの木には、ちゃんと、石オノでひとりひとりの村人の数が、彫りこんであるからだ。あかんほうが生まれると、村長は、そのケヤキによじのぼって、新しい石オノで印をつけるし、死人がでると、いままでの印の上に×の印を彫りつける。

おれたちの部落のまん中を通して、深川という川が流れている。川はすこし上流にさかのぼると狭くなるが、おれたちの部落のあたりでは、おとなが両手をつなぎあわせても、五人じゃ足りないくらいだ。この川をくだって行けば、あの遠い海まで行けるのだ、と、おれたちは聞かされて育った。

おれたちは、夏になると、よくこの川で泳ぐ。少し上流にいくと「ドボンコ」と呼ぶ淵があって、そこで泳

